

# 『新撰字鏡』の玉篇引用に関する試論

永井 圭司

## 要旨

平安初期部首分類辞書『新撰字鏡』において、『玉篇』がどのように引用されたのか、先行研究の検討と『新撰字鏡』天治本草部の調査から考察する。新撰字鏡内における玉篇引用の態度は、各部首の所属文字を前から後ろへと順に採録していくものであるが、それは網羅的に行われるのではなく穴の空いたように飛び飛びに採られている。この実態について、『新撰字鏡』天治本と『篆隸万象名義』を対照調査すると、玉篇の引用は飛び飛びに採録したのではなく、玄応『一切経音義』と『切韻』から先行して引用されたと思しき字を避けるように採っていると判断できる。そうした操作が可能なのは、主要引用辞書のうち唯一の部首分類辞書である『玉篇』のみである。『新撰字鏡』の編者は『玉篇』を補完的役割として活用したものと考えられる。また、飛び飛びに採録しているように見える実態は、他辞書からの引用字を避けた結果として起きたものと思われる。

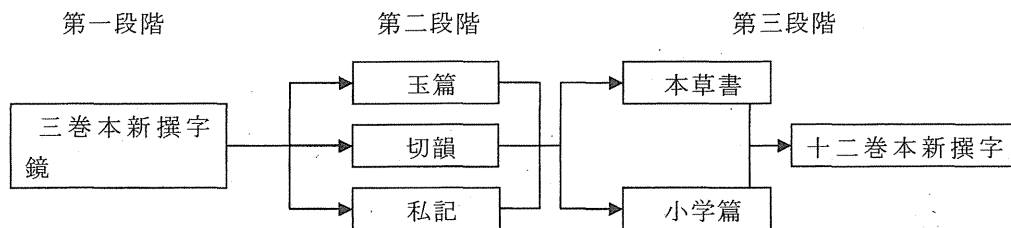
## 1. はじめに

平安初期の字書『新撰字鏡』(898～901 成立)は、序文により玄応『一切経音義』、『切韻』、『玉篇』を主要引用辞書として利用したことが知られる。これら三書から必ずしも平均的に注文を採録していったわけではなく、引用の様態にはかなり偏りが見られる。端的な例としては、谷部や豆部のように玉篇のみから引用して成立していると思われる部首が存する。こうした引用の様態には序文に記されていない編纂過程や方針が潜んでいるものと思われる。

本稿では、主要引用辞書である玉篇を、編纂にどのように利用していったのかという点を主眼において考察する。主要引用辞書のうち、玉篇のみが部首分類体であり、同じく部首分類体を採った新撰字鏡の編纂に貢献したのは想像に難くない。その貢献は具体的にどのような方法であったのか。先行研究と、新撰字鏡の実態の調査から、その手掛かりを得るのが目的である。

## 2. 序文に見る編纂過程

新撰字鏡序文には編纂の過程についての概要が示されている。これによると、玄応音義と日中の諸本をもとに三巻本の辞書を撰した後、玉篇・切韻を手に入れ、また私記を加えて文字を増補し、さらに小学篇や本草書をも参照して字を増やし完成したのが十二巻の新撰字鏡であるという。これに従って編纂過程を図示すると次のようになるだろう。



序文の記述では、切韻・玉篇・私記の類は同列に見える。しかし、切韻・玉篇とも引用出典群

がかたまってあらわれていることから、必ずどちらかが前後することになる。そこには編纂における方針のような何らかの基準が設けられていたはずである。

そこで本稿では、序文と本文との内容の検証を試みる。貞荊(1959)は新撰字鏡の書物引用の状態を明らかにしたが、そこに編纂過程や方針についての視点を加えて、改めて検討するのである。

### 3. 先行研究

玉篇の引用という点で注目しておくべき先行研究を見る。貞荊(1959/60/61)は新撰字鏡全体を通して、主要引用出典(玄応音義・切韻・玉篇)やその他の書がどのように引用されているかをかなりの部分解き明かしたものである。この研究によって、玄応・切韻・玉篇を主とする引用出典が、新撰字鏡においてそれぞれの出典ごとに一群をなしてあらわれていることが明らかとなった。また新撰字鏡の出典引用態度は、各出典に掲載されている順序に従って同じように前から順々に採録していくというものであったことを発見した。たとえば切韻引用グループには切韻に記載されている順番に標字が並んでいるという具合である。さて、この研究の結果のなかで、主に玉篇のみで構成されている部首がいくつか見られるという注目すべき点がある。第58部首の勺部・谷部 62・鼠部 82・門部 137・黄部 138・鬲部 139・豆部 149の7部がそれである。また、玄応音義と新撰字鏡との関係を精査した池田(1984)では、「玄応引用の見えない部が存することは、それらの部が三巻本の段階ではまだ次第されていなかった可能性の高いことを暗示する」と述べ、斗部 55・勺部 58・谷部 62・豕部 79・鼠部 82について「ほぼ玉篇引用のみからなっており、これらの部は十二巻本編纂の段階で次第されたと考えるべきであろう」とする。

以上のように、新撰字鏡は三巻本の段階では十二巻本同様の160部を備えていたとは考えられず、玉篇は新たに部首を加える材料となったことが窺える。ここには玉篇の引用過程の一端があらわれていると言えよう。

### 4. 新撰字鏡革部に見る、玉篇引用の過程

貞荊(1959)は前節に述べた新撰字鏡全体の引用出典群を切り分けた方法を実証した論であるが、このなかに次のような奇妙な事態が確認される。新撰字鏡の出典引用はそれぞれの書における登場順に引かれている。ただしその引用は出典に記載されている字すべてを逐一拾っていくものではない。貞荊(1959)の言葉を借りれば、「玉篇からとびとびに(そこには何らかの取捨基準があるだろうが、それは今後の研究にまつとして)標字を採」という事態になっているのである。玉篇の取捨基準とは何か、あるいはそうした基準があるのかが問題となる。

この問題について考察するために、貞荊(1959)の追試とさらなる検証を試みる。新撰字鏡の一部首をサンプリング対象とし、貞荊(1959)と同様に『篆隸万象名義』によって玉篇部分の追試を行う。これにより玉篇が「とびとびに」引用されている実態が確認できよう。さらに、玉篇引用部分に引用されなかった他の玉篇標字が、新撰字鏡ではどのようにあらわれているのかを調査する。これは玄応引用や切韻引用が玉篇引用にどう影響を与えたかを考察するためである。

本稿では、新撰字鏡天治本第49部・革部を調査する。その理由は次の2点である。

- ・貞荊(1959/60/61)に従えば、革部は主要引用出典(玄応音義・切韻・玉篇)のみから成ること。
- ・革部は玉篇にもそのまま同一部首が存在しており、また新撰字鏡において玉篇の他部首字を

統合して配属させていない部首であること<sup>註1</sup>。

これにより上述した確認したいポイントが比較的簡便に判断可能であると見る。革部は総項目数 139、総字数 159 で、1 項目ごとに通し番号を付すと、1 から 55 まで 65 字が玄応音義引用部分、56 から 69 まで 14 項目 17 字が切韻引用部分、70 から 139 まで 70 項目 77 字が玉篇引用部分である。以下に天治本と篆隸万象名義の対照結果を掲載する。

(左端は新撰字鏡天治本の各項目の引用出典。「玄」=玄応音義、「切」=切韻、「玉」=玉篇。「新」は天治本革部の各項目の通し番号。「篆」は篆隸万象名義革部の各項目の通し番号。「×」は記載無し字。右欄は同一項目内の異体字標字。左表は天治本の字順に、右表は篆隸万象名義の字順に並べた)

	新	篆	
玄	1		
玄	2	48	47
玄	3	×	
玄	4	51	
玄	5	52	
玄	6	×	
玄	7	69	
玄	8	59	
玄	9	×	
玄	10	63	
玄	11	46	
玄	12	×	
玄	13	77	
玄	14	130	
玄	15	43	
玄	16	×	
玄	17	9	
玄	18	10	
玄	19	×	
玄	20	68	
玄	21	116	
玄	22	134	
玄	23	66	
玄	24	×	
玄	25	×	
玄	26	16	
玄	27	60	

	新	篆	
玄	1	1	2
玉	121	1	
玄	46	3	
切	57	4	
	×	5	
玉	122	6	
玄	54	7	
玄	55	8	
玄	17	9	
玄	18	10	
玉	123	11	
	×	12	
切	66	13	
切	58	14	
玄	50	15	
玄	26	16	
	×	17	
玉	124	18	
切	61	19	20
切	62	21	
玄	30	23	22
玉	120	24	
玄	49	25	26,27
玉	125	28	
	×	29	
玉	126	30	
玉	127	31	

玄	28	×	
玄	29	33	
玄	30	23	22
玄	31	32	
玄	32	×	
玄	33	×	
玄	34	105	
玄	35	110	
玄	36	50	
玄	37	79	
玄	38	×	
玄	39	96	
玄	40	×	
玄	41	×	
玄	42	71	
玄	43	72	
玄	44	×	
玄	45	73	
玄	46	3	
玄	47	×	
玄	48	×	
玄	49	25	26,27
玄	50	15	
玄	51	×	
玄	52	×	
玄	53	×	
玄	54	7	
玄	55	8	

玄	31	32	
玄	29	33	
玉	128	34	
玉	129	35	36
玉	130	37	
玉	131	38	
玉	116	39	
切	63	40	
玉	132	41	42
玄	15	43	
玉	133	44	
	×	45	
玄	11	46	
玄	2	48	47
玉	134	49	
玄	36	50	
玄	4	51	
玄	5	52	
玉	135	53	
玉	136	54	
切	56	55	
玉	137	56	
玉	138	57	
玉	139	58	
玄	8	59	
玄	27	60	
玉	70	61	
玉	73	62	

切	56	55	
切	57	4	
切	58	14	
切	59	78	
切	60	127	
切	61	19	20
切	62	21	
切	63	40	
切	64	86	
切	65	×	
切	66	13	
切	67	81	
切	68	76	
切	69	106	
玉	70	61	
玉	71	64	
玉	72	65	
玉	73	62	
玉	74	67	
玉	75	×	
玉	76	70	
玉	77	74	
玉	78	75	
玉	79	80	
玉	80	83	
玉	81	84	
玉	82	87	
玉	83	88	
玉	84	91	
玉	85	92	
玉	86	93	
玉	87	90	
玉	88	94	
玉	89	95	
玉	90	98	
玉	91	99	
玉	92	100	

玄	10	63	
玉	71	64	
玉	72	65	
玄	23	66	
玉	74	67	
玄	20	68	
玄	7	69	
玉	76	70	
玄	42	71	
玄	43	72	
玄	45	73	
玉	77	74	
玉	78	75	
切	68	76	
玄	13	77	
切	59	78	
玄	37	79	
玉	79	80	
切	67	81	
	×	82	
玉	80	83	
玉	81	84	
玉	119	85	
切	64	86	
玉	82	87	
玉	83	88	
	×	89	
玉	87	90	
玉	84	91	
玉	85	92	
玉	86	93	
玉	88	94	
玉	89	95	
玄	39	96	
玉	117	97	
玉	90	98	
玉	91	99	

玉	93	102	
玉	94	103	
玉	95	104	
玉	96	107	109
玉	97	111	
玉	98	112	
玉	99	113	
玉	100	114	
玉	101	115	
玉	102	117	
玉	103	118	
玉	104	119	
玉	105	120	
玉	106	122	
玉	107	123	
玉	108	125	
玉	109	126	
玉	110	129	
玉	111	131	
玉	112	132	
玉	113	135	
玉	114	136	
玉	115	137	
玉	116	39	
玉	117	97	
玉	118	128	
玉	119	85	
玉	120	24	
玉	121	1	
玉	122	6	
玉	123	11	
玉	124	18	
玉	125	28	
玉	126	30	
玉	127	31	
玉	128	34	
玉	129	35	36

玉	92	100	
	×	101	
玉	93	102	
玉	94	103	
玉	95	104	
玄	34	105	
切	69	106	
玉	96	107	109
	×	108	
玄	35	110	
玉	97	111	
玉	98	112	
玉	99	113	
玉	100	114	
玉	101	115	
玄	21	116	
玉	102	117	
玉	103	118	
玉	104	119	
玉	105	120	
	×	121	
玉	106	122	
玉	107	123	
	×	124	
玉	108	125	
玉	109	126	
切	60	127	
玉	118	128	
玉	110	129	
玄	14	130	
玉	111	131	
玉	112	132	
	×	133	
玄	22	134	
玉	113	135	
玉	114	136	
玉	115	137	

玉	130	37	
玉	131	38	
玉	132	41	42
玉	133	44	
玉	134	49	
玉	135	53	
玉	136	54	
玉	137	56	
玉	138	57	
玉	139	58	
	×	5	

玄	3	×	
玄	6	×	
玄	9	×	
玄	12	×	
玄	16	×	
玄	19	×	
玄	24	×	
玄	25	×	
玄	28	×	
玄	32	×	
玄	33	×	

	×	12	
	×	17	
	×	29	
	×	45	
	×	82	
	×	89	
	×	101	
	×	108	
	×	121	
	×	124	
	×	133	

玄	38	×	
玄	40	×	
玄	41	×	
玄	44	×	
玄	47	×	
玄	48	×	
玄	51	×	
玄	52	×	
玄	53	×	
切	65	×	
玉	75	×	

以上から言えることは、篆隸万象名義革部には、玄応部分標字が半数強、切韻部分標字がほぼ全て記載されていることである。筆者はこの結果をうけて、次の仮説を主張する。結論から言えば、玉篇は新撰字鏡において穴埋めの役割を果たしたということである。

玄応音義は対象の書物に記載された語を登場順に並べる音義、切韻は韻によって分類されている韻書であるので、当然各見出し字の部首はばらばらになっている。これらから文字を採り、部首分類辞書である新撰字鏡に組み込む場合、各書物全体を通読し、目的の部首に属する文字を確認して逐次拾っていくほかない。とすれば、冒頭から一字ずつ確認していった文字を拾うという方法がもっとも簡単である。こうした事情が、新撰字鏡の文字排列に反映されていると考えられる。

対して、玉篇からの引用も同様に前から順に後ろへ向かって字を採録しているが、玉篇引用は玄応音義・切韻に比べて遥かに容易である。玉篇は部首分類辞書であるので、玄応音義や切韻の引用のように、編者自ら部首を弁別する労力がかなり軽減される。ある特定の部首の文字を採録したければ、玉篇のその部首が記されたところを開き、そのまま書き写していけば良い。部首分類辞書を作る際に、部首分類辞書でない玄応音義や切韻から文字を引用しようと思えば、作業は大変なものになり、また見落としの可能性も高くなる。それに対し、玉篇のような部首分類辞書からの引用であれば、容易であることに加え、見落としはまずありえないだろう。玉篇の利用価値の一つはまさしくそこにあったと考えられる。つまり、玄応音義や切韻から一通り文字を採録した後で、その部首の穴埋めをする役割を果たしたのである。新撰字鏡では同一字を複数箇所に記載することを許している<sup>註2</sup>が、同部首内には基本的にその傾向は見られない。複数の辞書があれば必ずある程度は標字が重なるものがあるであろうから、これは同字が同部首内にあられるのを避けるように引用しているということである。そうした基本方針に則ろうとする際には、玉篇は最も利用しやすい。

前掲した表からそのことを確かめてみよう。天治本にあつて篆隸万象名義に記載が確認された項目は玄応 35 項、切韻 13 項で、天治本にあつて篆隸万象名義に記載のなかった項目は玄応 20 項、切韻 1 項である。篆隸万象名義の標字順に通し番号を打った右側の表を見ると、篆隸万象名義の全体に玄応音義・切韻部分に記載されている字が広がっており、玉篇部分はそれを避けるように位置している。篆隸万象名義に記載されていて天治本に記載がないものが 10 項

認められるが、新撰字鏡と篆隸万象名義が編纂に利用した玉篇が同一ではなかったことによるものか。以上を考慮すれば、やはり何らかの取捨基準に従って採録を選んだと見るより、玄応音義・切韻部分に既に引用してある字を避けたと見る方が蓋然性が高いだろう。

先の仮説の繰り返しになるが、文字を漏らさないよう埋めていく作業は、先行部首分類辞書である玉篇だからこそ可能なことである。逆に、書物に登場する順に字句の排列される音義や、韻目ごとに文字が排列される韻書を後から利用して同様に穴埋めしようとするれば、ともに書全体を見渡さねばならず、その作業量は玉篇に比して膨大なものになる。このように考えると、玉篇は切韻より後に、掲出字を補完し網羅する目的で利用されたものだと考えるのが妥当であろう。そして、貞荊(1959)に指摘された引用状況がとびとびになっているという事態は、玉篇によって他の辞書の穴を埋めるという作業によって、結果的に引き起こされたのである。

この考え方は、上田(1981)の疑問に答えると思う。上田(1981)は新撰字鏡の切韻引用部分を精査し、その注文内に玉篇の注文内容が併合されていることを指摘した。さらに、玉篇引用部分には切韻の注文が併合されていないと述べた。こうした事態について「新撰字鏡は部首分類であるから、玉篇を先に記入してその中に切韻を併合していくほうが簡便なはずだが、なぜその逆になっているのであろうか。(略)種々の推定は可能だが、決定的な理由はまだ考えていない。」とした。まず、玉篇注文を切韻標字に併合したという指摘は、玉篇を切韻の後に引用したという点で上の筆者の主張の裏づけとなる。そして、玉篇を補完的に利用したととらえることによって、この疑問は解釈可能である。編纂途上の新撰字鏡と玉篇をつきあわせれば、どの標字が引用済みでどの標字がまだなのかが簡明である。同時に、既に切韻から引用済みの標字が見つければ、切韻標字のなかに玉篇の注文内容を組み込むだけで済ませられる。その結果、他書より引用済みの標字は玉篇引用群において記載がなく、とびとびの引用実態があらわれることになるのである。上田(1981)の示唆的な指摘を考慮すると、さらにおそらく玄応引用部分についても同様の操作が行われたのではないかと予想することができるが、これは稿を改めて考察したい。

また、玉篇の引用が主要引用辞書のなかで最後であったという考えの参考となるものに、貞荊氏(1985)がある<sup>注3</sup>。論旨は明解で次の通りである。

・『新撰字鏡』天治本と抄録本とを比較すると、字順に違いがある。

・その違いによって、引用出典群の切り分けに以下のように差がでる。

	天治本	抄録本
83 虫部	音義前半－切韻－音義後半－玉篇－不詳	音義－切韻－玉篇－不詳
87 魚部	不詳－玉篇－切韻－音義	音義－切韻－不詳－玉篇
100 心偏	音義－玉篇－不詳－切韻－不詳	音義・不詳－切韻－玉篇－不詳
101 手偏	不詳－切韻－玉篇－不詳－音義	不詳・音義－切韻－玉篇－不詳
70 革部	音義－不詳－切韻－不詳－玉篇－ －小学篇－本草－玉篇－小学篇－本草	音義・不詳－切韻－玉篇－小学篇－本草

・天治本と抄録本では字順が異なることによって出典群が異なり、結果から見て、抄録本の方が編纂時の字順に従った本来の文字排列であったと言わざるを得ない。

87 魚部以外の部首で、分断されていた出典群が一個にまとまり、すっきりと整ったものと

なっている。これによれば、いずれも玄応音義、切韻に対して玉篇の位置が最後尾となっている。貞苺氏は明言していないが、玉篇が主要引用辞書のうち最後に利用された可能性はかなり高いと言えよう。さらに言えば、三卷本新撰字鏡の編纂において玄応音義に加えて参照されたというなんらかの日中の書物は、おそらく「音義」一群とセットで「出所不詳」とされている部分に現れているものであろう。また、それに対して後方に現れる「出所不詳」部分は、切韻や玉篇とともに参照され、主に最後に付け加える形で用いられたと見える<sup>註4</sup>。

以上の上田(1981)、貞苺(1985)が事実上述べているように、玉篇は主要引用辞書のなかで最後に引用された可能性が高い。それは部首分類辞書である玉篇を穴埋めの役割、仕上げの役割として活用した引用方針によるものである。そのように考えることで、貞苺(1959)や上田(1981)の各々の疑問点に一貫した解釈を与えることができる。

## 5. まとめ

本稿で得られた結論は次のようである。

- ・新撰字鏡の玉篇引用は切韻の後に行われ、玄応音義・切韻で引用済みの字を避けるように採録された。
- ・玉篇は穴を埋めていくように引用され、各部の補完を志向したと考えられる。
- ・これにより、結果的に玉篇引用はとびとびに採録されているように見えた。

今回は仮説の検証として革部をサンプルとして取り上げ考察を進めた。今後はこれを天治本全体に広げ、考察を深めていく予定である。また今回の結論は、部首内文字排列の問題だけでなく、部首立てについても示唆を与えられるものと考えている。次回の課題としたい。

## 注

- 1 新撰字鏡の部首の中には、玉篇の複数部首を統合して一部首のなかに配属させているものもある。たとえば玉篇におけるㄅ部・ㄆ部は新撰字鏡においてはㄅ部に統合されている。また、玉篇において一部首であるものが新撰字鏡においては二つの部首となっているものもある。たとえば新撰字鏡においては心部と忄部は分けられているが、玉篇ではどちらも心部である。
- 2 永井(2008a,b)に述べた。ただし、ごく少数は同部首内で同字が見られる。けれども基本的な態度としては、同部首内に同字は標字しないと見て良いと思われる。
- 3 1985年に氏が訓点語学会で発表した内容である。残念ながら論文にはなっておらず、学会の発表稿のみ『新撰字鏡の研究』に掲載されている。
- 4 全ての部首で天治本と抄録本の対照によってこうした結果が得られるわけではない。筆者の追試したところでは、天治本と字順が変化しない部も存在する。

## 使用テキスト

新撰字鏡(天治本・享和本) 『新撰字 増訂版』(京都大学文学部国語学国文学研究室)  
篆隸万象名義(高山寺本) 『高山寺訓点資料1』(東京大学出版会)

## 参考文献

- 池田証寿(1982)「玄応音義と新撰字鏡」(国語学 130, p1-18)  
池田証寿(1984)「新撰字鏡玄応引用部分の字順について」(国語国文研究 71, p40-58)  
上田 正(1981)「新撰字鏡の切韻部分について」(国語学 127, p13-20)  
阪倉篤義(1967)「新撰字鏡の再検討 ―享和本を中心に―」(『本邦辞書史論叢』山田忠雄編、三省堂)  
貞苺伊徳(1959/60/61)「新撰字鏡の解剖〔要旨〕―その出典を尋ねて―」(訓点語と訓点資料 12-)  
貞苺伊徳(1985)「『新撰字鏡』抄録本の異本としての一面―その祖本は原本に近かったか―」(第52回訓点語学会研究発表会原稿)

上2論、『新撰字鏡の研究』汲古書店(1998)、所収  
永井圭司(2008)「『新撰字鏡』天治本における「在一部」注記」(名古屋言語研究 2, p37-46)

永井圭司(2008)「新撰字鏡天治本における「在一部」注記の付記方針について」(第99回訓点語学会発表)

山田健三(1995)「奈良・平安時代の辞書」(『日本古辞書を学ぶ人のために』西崎亨編, 世界思想社)

(ながい けいじ/日本語学)